

ネズミ浄土

(芸北の昔話集)



挿絵:入澤良枝

むかしむかし、あるところに、おじいさんとおばあさんがおったげな。

おじいさんが山に仕事に行くというので、おばあさんはムスビを作ってやったんと。

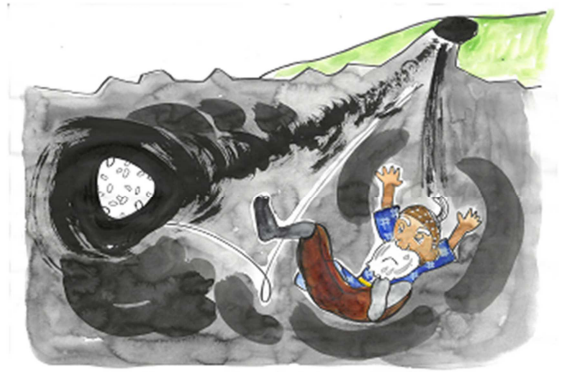


さて、昼になって、おじいさんがムスビを出して食べようとしたら、ムスビが手元からぽろりと落ちて、急にコロコロ、コロコロとまくれだしたげな。

おじいさんは、あわてて「おい待て」「おい待て」と、まくれるムスビを追いかけて行ったんと。

そしたらムスビはコロコロ、コロコロまくれて、うぐろ(モグラのこと)の穴の中へまくれこんだげな。

ムスビを追いかけてきたおじいさんも、うぐろの中へドスンと落ちてしもうた。



おじいさんは腰をしたたかに打って、痛い腰をさすりながら目をこらすと、あたりは真っ暗やみじゃったが、しばらくすると目が慣れてきた。見るとそこはなんとネズミたちの世界で、二匹のネズミが楽しげに餅を搗きよりましたげな。



おじいさんは岩陰に隠れて、その様子じっと見とったんと。

おじいさんに見られているとも知らず、二匹のネズミは、スットンバットン、スットンバットンと餅を搗きよったげな。

「猫さえござらにゃ、ネズミの世ざかり、極楽浄土のまん中だ」と歌いながら、スットンバットン、スットンバットンと餅を搗きよったげな。

おじいさんは「なにになに『猫さえござらにゃあネズミの世ざかり』？ よし、それなら、わしが一つ、猫の声を出してネズミどもを脅しちゃう」。

おじいさんは自分の鼻をつまんで、喉の奥の方から絞り出すように「ニャアオ」「ニャアオ」と猫の鳴き声をまねると、二匹のネズミは急にワナワナ震えだし、あっという間に居なくなっただげな。



目の前には、今搗きあがったばかりの餅がホカホカと湯気を立てて残っとった。

「こりゃあ、おいしげなええ餅じゃ。」おじいさんは、ネズミの残した餅をさげて家に持ち帰った。

「ばあさん、ばあさん、見てくれえ、つきたての餅じゃ。これを今から二人で食べようで」

「どうしんさったんの？この餅は？」

「なにの、ネズミが搗きよったのを、ちょっぴり脅かしたんよ」

とわけを話したそうな。

おばあさんはそれを聞いて、「そりゃあちょっとネズミに悪いことをしたんじゃないんかのう」と気が咎めましたが、おいしそうな餅の匂いに負けて、おじいさんと一緒に餅を食べたげな。



さて、さて、それから何日かしてからのことじゃ。

おじいさんはまた餅が喰いとうなって、

「ばあさんや、わしゃあまたあの穴へ行ってみよう思うけえムスビをつくってくれえや」

と言うたげな。

「えっ、また、行кинさるんかいの？はあやめた方がええんじゃないんかのう」

「いいんや、せやあなあ。またおいしい餅を持って帰っちゃるけえ、楽しみに待っとけえ」
と言うんで、おばあさんは仕方なくムスビを作ってやりました。

さて、おじいさんは前と同じところに座って、前と同じようにムスビを取り出して、ムスビを下に落としたんと。ところが、この前のようにうまくくれしてくれません。

「おかしいのう、この前は頼みもせんのにコロコロ
コロコロ勝手にまくれ出したのに」「おい、ムスビ
や。まくれえや」と、手でわざとまくって、うぐろの穴
の中へ無理やり押し込んだげな。

それから前と同じように自分も穴の中へ入りこん
でいくと、前と同じように二匹のネズミが餅を搗きよ
ったんと。歌も前と同じで「猫さえござらにゃ、ネズミ
の世ざかり、極楽浄土のまん中だ」スットンバットン、
スットンバットンと楽しげに餅を搗きよったげな。



しめしめ、全部前と同じじゃ。おじいさんは、鼻をつま
んで喉の奥から絞り出すように、「ニャアオ」「ニャアオ」と
猫の鳴きまねをしたげな。これでネズミの奴らは一目散
に居なくなってしまうはず……と。

ところがどうしたことじゃ？どんなに上手に猫の鳴声
をしても、二匹のネズミは逃げんかったげな。それどこ
ろか、ジロリとおじいさんの方に向き直った。

「おんどれ、この前、餅を盗って逃げたじいさんじゃ
な。待とったでえ。今度はしごうしちやるけえの。お
い、みんな出てこい」





とネズミが叫ぶと、周囲の穴から、真っ黒いドブネズミや、大きなイエネズミが次から次へといっぱい出てきておじいさんを取り囲み、

「かかれっ」の合図とともに、おじいさんに噛みつくやら、かぐるやらしたげな。

おじいさんは血だらけになりながら、やっとのことで穴から這い出て、おばあさんの所までほうほうのていで逃げ帰った。

「ばあさん、ばあさん。助けてくれえ。餅どころじゃなかったよ。ネズミどもにしごうされたよ」

おばあさんは、怪我をして帰ってきたおじいさんを見てびっくりしました。

「じいさん、大丈夫かいのう？こりゃあ大罰(おおばち)が当たったんでえ、やっぱり悪いことをしちゃあいけんゆうことじゃのう」

と言いながら、おじいさんの介抱をしてやったそうな。

